ひろげようこころのネットワーク

9
September 2019（令和元年）

兵庫県・（公財）兵庫県人権啓発協会
兵庫県マスコット はばタン

ひょうご人権ジャーナル

きずな KIZUNA

INDEX

2 グラフで見る高齢者の人権
3 人の喜びと笑顔につながることを考えて
北原 佐和子さん（女優・介護士）
4 「地域包括ケアシステム」の基盤とは
筒井 孝子さん（兵庫県立大学大学院経営研究科 教授）
5 食からひろがる、地域のつながりをめざして
NPOひまわり会（明石市）
6 「ホームレス」とは誰なのか？
森川 すいめいさん（特定非営利活動法人TENOHASI（てのはし）理事）
7 ふれあいサロン
8 情報ぷらざ

特集 高齢者

いくつになっても豊かに生きる

Photo 神戸市 港の風景

特集 高齢者

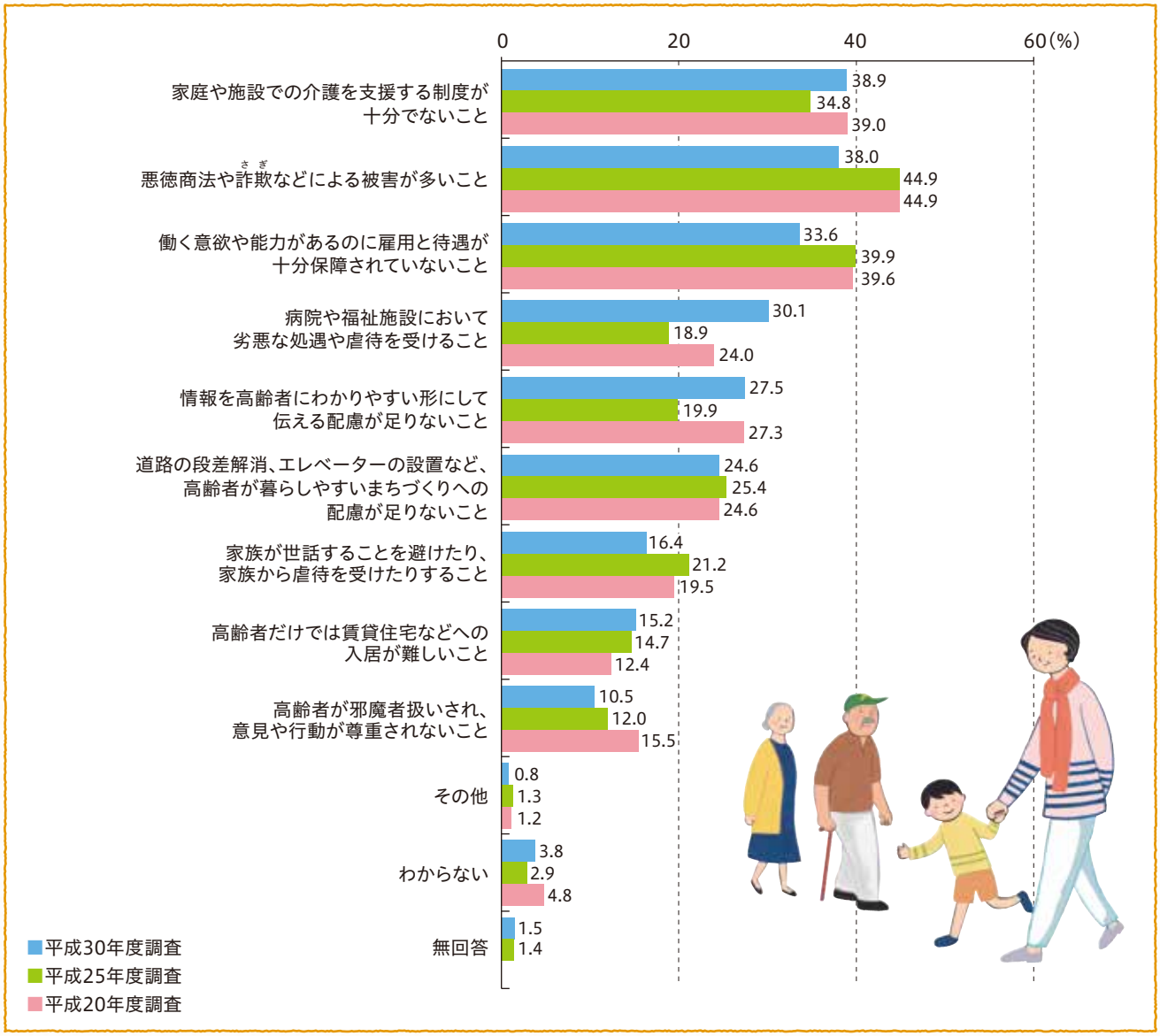
人生100年時代を迎え、高齢者が健やかに充実した生活を送ることができるよう、様々な取り組みが行われています。しかし、介護における身体的・心理的虐待、悪徳商法や詐欺による被害、雇用問題等といった高齢者に対する人権問題が起こっています。

本号では、高齢者の人権が尊重され、安心して生き生きと暮らせる社会づくりについて考えてみましょう。

グラフで見る高齢者の人権

平成30年度 人権に関する県民意識調査の結果より

高齢者に関することで、人権上、あなたが特に問題があると思われるのはどのようなことですか。（○は3つまで）



兵庫県が昨年度実施した人権に関する県民意識調査の結果を見ると、高齢者に関することで県民の皆さんが特に問題があると思うことは、「家庭や施設での介護を支援する制度が十分でないこと」が38.9%で最も高く、次いで「悪徳商法や詐欺などによる被害が多いこと」（38.0%）、「働く意欲や能力があるのに雇用と待遇が十分保障されていないこと」（33.6%）、「病院や福祉施設において劣悪な処遇や虐待を受けること」（30.1%）となっています。

この人に聞く！

人の喜びと笑顔につながることを考えて

女優・介護士　北原（きたはら） 佐和子（さわこ） さん

Profile

埼玉県出身。1982（昭和57）年歌手デビュー。女優に転身後はテレビドラマ、映画、舞台など数々の作品に出演。2005（平成17）年にホームヘルパー2級を取得し、東京都内の施設で介護実務に携わる。2014（平成26）年には介護福祉士の国家資格を取得。2016（平成28）年にケアマネージャー資格を取得。2013（平成25）年「プレシャスライフ 心の朗読会」を立ち上げ、「いのちと心の朗読会」を各地の小中学校や病院などで開催。

1980年代にアイドルとして活躍し、その後女優に転身した北原さん。現在、芸能活動の傍ら、介護士として介護の現場で働く二足のわらじを履いています。介護にまつわる講演活動やボランティア活動として朗読会にも積極的に取り組む北原さんに話を伺いました。

女優として活躍する中で介護士をめざしたきっかけは

女優業は仕事に波があり、精神的に不安定な時期もありました。30代になったときに自分の人生を考え、女優業をしながら何かできることに目を向けようと思いました。自分の人生を振り返った時、お友達のお子さんでダウン症の天君、視覚障害者や四肢麻痺の方との出会いが福祉の仕事に関わりたいという私の背中を押してくれました。

介護士として初めて働いた時の思い出は

それまで高齢者とのご縁がほとんどなかったので、介護の世界に飛び込んだものの最初は、施設内でたくさんの視線を感じて、立ちすくんで動けませんでした。車いすのテーブルをたたいたり、奇声を発したりしている方もいて……。でも共に過ごすうちに、テーブルをたたくのも奇声を発するのも、その人なりの表現方法であり、私に一生懸命声を掛けてくれているのだと気がついたのです。新米の私は、自分のものさしで表面的な一部分をとらえて判断していたのだと気づきました。

介護を必要とされる方と接する中で心がけていることは

「自分のこととしてとらえること」「その人のその行動にどんな意味や理由があるのか知ろうとすること」です。私たちが簡単に徘徊、拒否と片付けてしまう行動にもそれぞれ理由があることを理解しなければなりません。

介護の仕事を通して気づいたことは

多くの老夫婦や独居高齢者の皆さんは、寂しさ、不安を抱えて日々過ごしています。また介護に関わる家族も、このままいつまで続くのかという不安や両親が変化していくさまを受け入れる苦しさを抱えています。社会で現実に起きている老老介護や親の介護で疲れた家族の悲劇の根っこが見えてきました。芸能活動だけをしていたころの私には思いもよらないことでした。

女優と介護士の仕事の両立を支えているものは

女優として表舞台に立つときは、表現者として自分の魅せ方を常に考えていました。介護では、利用者さんが主役で私は脇役だと思っています。主役である利用者さんが笑顔を見せるために、どんなことが必要なのかを必死で考えています。たとえば認知症の方が私のしていることをキャッチしてくれたり、昨日はだめだったことが、今日してみたら大丈夫だったり、これら一つ一つの出来事が私の心の全てを支えています。

今後の活動や抱負について

今、看護学校に通っています。ケアマネージャーとして働く中で、看取りを見据えたケアプランの必要性を感じ、医療について学んでいます。私が関わる皆さんがより豊かに生きられるよう、また家族の皆様が幸せな気持ちで共に暮らせるように、夢あるケアプランを立てたいと思っています。

「地域包括ケアシステム」の基盤とは

兵庫県立大学大学院 経営研究科 教授 筒井孝子さん

地域包括ケアシステムの現状

「地域包括ケアシステム」は、「すべての住民が在宅等の住まいを基盤としながら、住み慣れた地域で最後まで生活を継続できるためのサービス提供の仕組み」と説明される近年の社会保障施策のキーワードです。この仕組みは、これまでにない新しい考え方に基づいていますが、その中核は、市町村が任意に設定した圏域内の医療や介護、生活支援にかかわるサービス提供体制を統合していくことにあります。

しかし、これらのサービス提供者は、さまざまな組織・団体に所属していますし、所持する専門資格も多様です。しかも近年は、当初は想定されていなかった近隣住民の助け合いを含む生活場面での手伝い等もこの範囲に含まれると理解されるようになっています。このため、このシステムは、行政だけでなく、識者によっても説明が異なり、まさに、アリが象を捉えるごとくとなっています。

様々な相互依存関係性の中で

さて人類は今日、これまでに類を見ないほどの広範囲にわたる相互依存関係を構築しています。これらの関係性は、経済や情報のグローバル化を実現させ、私達の生活の利便性を高めましたが、国家や民族、宗教に根差す争いは、世界各地で続いています。人々は、こうした争いに対しては、弱体化したジャーナリズムが創り出す虚実情報を利用するか、強いリーダーに面従腹背するか、または紛争地から離れた所では情報を遮断し無関心を装うという態度で臨んでいます。

それでも絶え間なく溢れ出る情報に対しては、自分が信じたい情報だけを取り込むようになりました。しかし、わかった気分になるだけでなく、自分だけは大丈夫と思う（これを正常化バイアスといいますが）ことは、本来は一刻も早く危機に備えなければならない非常事態であるにもかかわらず、その認識が妨げられることをも意味しています。この結果として生命の危険にさらされる状況を招きかねないことは、甚大な被害を出した東日本大震災後にも示されました。

こうした状況と冒頭に述べた地域包括ケアシステムとは決して無関係ではありません。なぜなら、このシステムは、日常生活圏域（概ね中学校区）と呼ばれる行政単位ごとに創られていますが、その圏域内の住民は、互いを気遣いながら、多様な価値を認め、錯綜した依存関係性を持ち続けることが要求されるからです。

地域包括ケアシステムを機能させるために

このシステムは、自らの隣人となる多様な個性をもった他者に対して関心を寄せ、これを認め、共感できる感性を人々が持たなければ機能しません。別の言葉でいうならば、地域包括ケアシステムという仕組みは、それぞれの人々が「もし、頭の数だけ人の考えも違うというのであれば、人の心の数だけ、愛情の種類も違うのじゃないかしら」（出所：レフ・トルストイ『アンナ・カレーニナ』）という素朴な真実を認め合うことでしか機能できないのです。

このようなシステムが、本当に定着しうるかについては、世界に先駆けて高齢化する日本の試みとして、国際社会からも強い関心が寄せられています。

Profile

医学博士、工学博士、教育学修士、社会学修士。研究領域は、医療・保健・福祉領域のサービス評価、マネジメント等。介護保険制度の要介護認定システムにおけるコンピュータによる一次判定システムや診療報酬に活用される「看護必要度」の開発に関する研究に従事。現在は、地域包括ケアシステム、地域医療構想を支える理論構築およびこの実践への応用に関する研究を進めている。

取材手帖 Jinken Report

食からひろがる、地域のつながりをめざして

NPOひまわり会（明石市）

NPOひまわり会
明石市松が丘2丁目3-7 松が丘ビル1階
TEL 078-913-7784
http://npohimawari.jugem.jp/

高齢者の食を地域で支える

2003（平成15）年発足の「NPOひまわり会」は、明石市と神戸市にまたがる明舞団地を中心に、「ふれあい食事処　明舞ひまわり」で食堂・配食事業をはじめ、料理教室や食育出前講座、イベントの開催や地域の独居高齢者の相談窓口事業を行っています。

高齢化が進む明舞地区ですが、中でも独居高齢者や認知症高齢者、虚弱高齢者は増加傾向にあります。そんな中、「食べることは生きること、高齢者の食を地域で支える」を目標に、お弁当を手渡し、声をかけながら高齢者を見守る活動と誰でも集まれる居場所づくりに取り組んでいます。

食とともに心を届ける

スタッフは現在45名、全員がボランティアで活動しています。平均年齢は71・5才と高齢ですが、食堂には「いらっしゃいませ」という明るい声が響き、一日約170食を用意するという厨房は活気にあふれていました。

「明舞ひまわり」の食事は、「安心」「美味」「栄養」がそろっているだけではなく、食を提供することに加え、笑顔で会話しコミュニケーションをとることを忘れない〝あたたかな心〟も一緒に届けていることが魅力です。

会の立ち上げ人でもある前代表の入江一恵（いりえかずえ）さんは、「利用者から『ありがとう』『おいしかったよ』と喜ばれることがスタッフのやりがいにつながり、皆『明日もがんばろう』という元気が湧いてきます」と語ります。

食の支援から人と人のつながりを

三年前からは「地域支え合いの家」として相談窓口も始めました。独居高齢者の生活相談や各種イベントの企画・開催にも力を入れています。昨年度は生活相談がひと月平均約10件、各イベントへの参加者がのべ643名となりました。

このような活動は、高齢者が家に引きこもらないように、誰もが参加し、安心できるふれあいの場をつくり、誰もが住み慣れた地域で笑顔で暮らし続けることができる地域コミュニティの仕組みをつくる一翼を担っています。

「人と人をつなぐのが『食』の持つ力」という入江さん。スタッフ一同、人を思う気持ちと、同世代を支えるという強い責任感をもって、今後も食を通して心が通い合う支援を続けていきます。

昼食時は大勢の利用者が集まり、にぎやかな食事を楽しみます。

寄付でいただいた風呂敷は300枚。ていねいにお弁当を包み、届けます。

色どり鮮やかな配食用のお弁当。心を込めて準備します。

安全・安心な旬の食材を使った定食。出汁のきいた薄味が人気です。

きずな TOPIC

「ホームレス」に対する偏見をなくすために

「ホームレス」とは誰なのか？

特定非営利活動法人TENOHASI（てのはし） 理事
森川（もりかわ） すいめいさん

TENOHASIの活動

2003（平成15）年に発足したNPO法人TENOHASI（てのはし）は、他の団体と協力しながら東京都豊島区を拠点にホームレス状態にある人たちがつながりを取り戻し、安心して生きていくための支援活動をしています。私たちがめざしているのは、孤立している人や生活に困っている人がいたら、誰かが自然に手を差しのべるような社会です。

ホームレス状態にあった田中さん（仮名）とは、刑務所から出所後、行くあてなく路上で途方に暮れていたところに出会い、声をかけました。

ホームレス状態に陥る背景

田中さんは、幼い頃、両親からの暴力に苦しみ、中学卒業後すぐに働き始めました。しかし、悪い仲間と過ごし、違法薬物に手を出すようになってそこから抜けられなくなり、ついには刑務所へ。出所後も支えてくれる家族もちゃんとした住まいもなく、何度も刑務所に出たり入ったりしていました。

「今まではシェルターに入っていました」。田中さんのいたシェルターは、一部屋に約30人、門限は17時、二段ベッドが並んでいて、ベッドの上だけが自分の空間でした。入所者同士の喧嘩は絶えず、田中さんが高齢入所者の介助をすることもあったそうです。常に暴力がある世界で生きてきたとも。

ホームレス状態にある人たちの多くは、何らかの理由で他者や社会から大切にされることなく、何かによってひどく傷つき、孤立した体験を重ねています。違法薬物を使用したことのある人たちは少数派です。

すべての人に居場所を

田中さんは私たちに出会い、住まいを得る支援（ハウジングファースト（Housing First））により、安心して過ごせる住まいを得ました。「こんなに自由で安心して眠れるのは初めてです」と田中さんは喜んでいました。

その後、田中さんは、優しかったという親族と再会します。親族との間で、互いに特に感情を露（あら）わにし、怒りと涙に暮れながらもふれあうことで次第に心が癒され、自分を大切にするようになったといいます。

私たちは、孤独に耐えて生きている方々と出会い、話し、一緒に考え、試行錯誤しながら安心できるつながりとホームを取り戻すお手伝いをしています。一人ひとりが自分自身を大切にできるようになることをめざして活動を続けます。

Profile

1973（昭和48）年、東京生まれ。精神科医。2003（平成15）年に「TENOHASI」を立ち上げ、現在は理事として東京・池袋で炊出しや医療相談なども行う。2009（平成21）年、認定NPO法人「世界の医療団」ハウジングファースト東京プロジェクト代表医師、2013（平成25）年同法人理事に就任。

きずな図書館

漂流老人ホームレス社会

著者／森川すいめい　発行所／朝日文庫

本書は、森川氏が池袋を拠点に、職をなくし、家をなくし、家族とはなれ行き場をなくした人々と向き合ってきた現実がありのままに描かれています。

ホームレスの状態に至った人々は、認知症、うつ病、障害、虐待、統合失調症など様々な背景をもち、支援の制度があっても相談に行くことができない人が多数です。そんな彼らの現実と20年以上向き合ってきた著者は、「ホームレスは遠い世界の話ではない」と読者に語ります。

「私たちの半歩横で起こっている現実を知ってほしい」

「ホームレスとは、単にホームを失ったのでなく、安心できる場を失った人たちのことなのだ」

本書には、ホームレス状態の人たちに対する正しい理解と、生きづらさを抱えた人たちに向けて何ができるかの問いかけが綴られています。

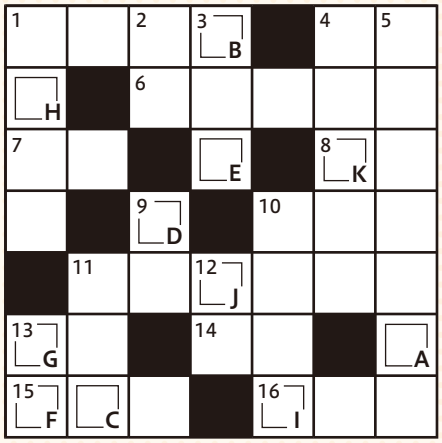
ふれあいサロン

HUREAI SARON

投稿&クロスワードで

「オリジナルボールペン&フリクションペンセット」をプレゼント！

問 A～Kの文字を順番に並べると、何という言葉になるでしょう？



タテのカギ

1　誰もが○○○○して暮らせる社会をめざしたい
2　便り。消息。「音○○がない」「ご無○○」
3　「九十九」の読み方は？
4　食事をする部屋。ダイニングルーム
5　高齢者が高齢者を介抱し、世話をすること
9　在宅介護を受けている人を昼間のみ預かってリハビリや世話を行うことを“○○ケア”と言います
10　フランス語でチョコレートのことです
11　神戸市北区にある、日本三古湯の一つとして知られる温泉地
12　細長い四肢を持つ優美な外形の動物。雄には枝分かれした大きな角があります
13　身の上などに悪いことが起こらないこと。「どうぞご○○で」

ヨコのカギ

1　おはよう・こんにちは・こんばんは
4　姫路・竹田・篠山・赤穂・明石・洲本など、県内には観光の中核となっている○○や○○跡がたくさんあります
6　結果の良し悪しにかかわらず行動・運命を共にすることを「一蓮○○○○○」と言います。
7　内容の良否。「量より○○」
8　反対語は「白」です
10　教え導くこと
11　よく口ずさんだり歌ったりする大好きな歌
13　成長するにつれて呼び名が変わる出世魚の代表格。ツバス→ハマチ→メジロ→○○
14　過ぎ去った時。「○○を懐かしく振り返る」
15　自分や自分に関係のある事柄を他人に誇ること
16　身振り手振りを加えた話の最後には必ず“おち”がつきます

8月号の答え　ミライニホコレルマチヅクリ

読者からのお便り～8月号を読んで～

「グラフで見る同和問題（部落差別）」を見ると、結婚問題や同和地区への居住の敬遠が多い。「わからない」が依然として20%近くあるのには驚きを隠しきれません。小学校や中学校の義務教育で人権学習に取り組んでいると思われますが、正しい歴史認識がなされていなかったり、間違った認識をしていたりするのかもしれません。「同和問題（部落差別）とインターネット」を読んで思ったのは、顔が見えないことによるなりすましなどがエスカレート・悪質化しているということです。同和問題に限らず、ネットでの中傷や誹謗が多いのは困った現象です。（神戸市　安田 正則さん）

同和問題について学ぶ機会が減ってきているように感じました。若い世代にも、ちゃんと知ってほしい問題だと思います。一人ひとりが身近な問題として考えていかなければならないと思いました。
（たつの市　I・Mさん）

「読者からのお便り」の投稿掲載者（令和元年11月号）とクロスワードの正解者（抽選で10名）とに、「オリジナルボールペン&フリクションペンセット」をプレゼント。本誌「きずな」へのご意見やご感想、人々とのふれあいを通した心温まるエピソードなどを募集しています。どしどしご投稿、ご応募ください。

※投稿掲載時はペンネームの使用も可能です。
※当選者の発表は、賞品の発送をもって代えさせていただきます。

応募方法

はがき、FAX、Eメールで受け付け。クロスワードの答え、郵便番号・住所、名前（ペンネームを使用の場合も要併記）、電話番号、年齢、職業、本誌へのご意見・ご感想を明記の上、ご応募ください。

締め切り

9月30日（月）締め切り（必着）

応募先

〒650-0003
神戸市中央区山本通4-22-15
県立のじぎく会館内
（公財）兵庫県人権啓発協会
「きずな」ふれあいサロン係
TEL 078（242）5355
FAX 078（242）5360
Eメール info@hyogo-jinken.or.jp

※応募者および投稿者の個人情報は、管理を適切に行い、誌面づくり以外の目的には利用いたしません。

情報ぷらざ
information

「ひょうごケア・アシスタント制度」が創設されました

兵庫県では、高齢者・女性・障害者等の地域住民の方に、特別養護老人ホームや介護老人保健施設において、介護の補助的業務（配膳、掃除、洗濯、リネン交換等）を担っていただくことを支援するため、「ひょうごケア・アシスタント制度」を創設しました。

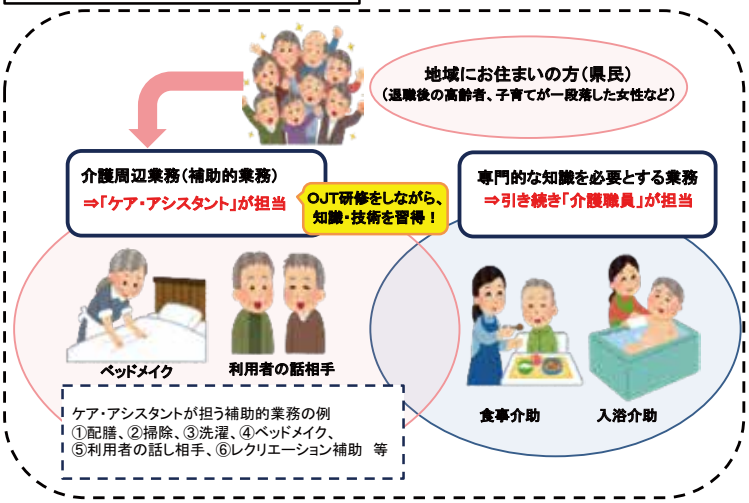
本制度では、1日3時間、週3回勤務などの短時間で、自分に適した就労の機会を得つつ介護現場の体験を行うことが出来ます。

また、介護の仕事を通して、地域へ貢献できるだけでなく、ご本人の生きがいづくりや健康づくりにもつながります。

取組は県下約60施設で予定されています。お近くの施設で、“ひょうごケア・アシスタント”として働いてみませんか。

取組施設は、ケア・アシスタント 検索
又は☎078-362-9117（兵庫県高齢政策課）まで。

ケア・アシスタント業務イメージ図



EVENT GUIDE
イベントガイド

イベント名 第3回人権セミナー

日時 9月28日（土）14:00～16:00

場所 兵庫県立のじぎく会館 ふれあいルーム
※JRまたは阪神電車「元町駅」から北へ徒歩15分・神戸市営地下鉄「県庁前駅」から北へ5分

内容 演題：「被差別部落と結婚差別」
講師：齋藤 直子さん
（大阪市立大学人権問題研究センター特任准教授）
※事前申込要（当日参加も可）
※参加資料代【一般】800円【会員・定期購読・学生】500円

問い合わせ 一般社団法人ひょうご部落解放・人権研究所
TEL 078（252）8280　FAX 078（252）8281

※その他のイベント情報は、当協会ホームページ「研修会・イベント情報」をご覧ください。

ラジオ関西「谷五郎の笑って暮らそう」（毎週火曜日10:00～13:00）で、12:35頃から「きずな」の記事等を紹介しています。

HALF TIME

昨年度きずなの取材にご協力いただいた三浦雄一郎氏の講演会に参加しました。

70歳を過ぎてからエベレスト登頂を三度も実現された三浦さんは、数々のケガや病気を乗り越えてこられたとは思えないほど、語り口は若々しく、パワーがあふれていました。

「いくつになっても目標や夢をもつことが大事」と言う三浦さん。すでに次の登山に向けて歩き始めていると話す表情は、少年のように生き生きと輝いていました。その輝きが思いをつなぎ、人を引き寄せ、大きな挑戦へとつながっていくのだと感じました。

人生100年時代といわれる今、誰もがいくつになっても自分らしく過ごせる社会について、みなさんとともに考えていきたいと思っています。

（西村）

「きずな」は、当協会ホームページからもご覧になれます。
兵庫県人権啓発協会 検索

（公財）兵庫県人権啓発協会　〒650-0003 神戸市中央区山本通4-22-15 県立のじぎく会館内
TEL 078（242）5355　FAX 078（242）5360　info@hyogo-jinken.or.jp

2019（令和元年）年9月発行